

武蔵野坐令和神社 縁起の語

まずは言霊というところから説き起こしたい。
言霊とは何か。

この言葉が、日本国において最初に使用されたのは、おそらく『万葉集』であろう。同集の巻第五、八九四の山上憶良の歌に、

神代より 言ひ伝て来らく そらみつ 大和の国は 皇神
の 厳しき国 言霊の 幸はふ国と 語り継ぎ 言ひ継が
れけり 今の世の 人もことごと 目の前に 見たり知りた
り
とある。

また、巻第十三、三三五三の柿本朝臣人麻呂の歌に、

葦原の 瑞穂の国は 神ながら 言挙げせぬ国 しかれど
も 言挙げぞ我がする 言幸く ま幸くませと 障みなく
幸くいまさば 荒磯波 ありても見むと 百重波 千重波し
きに 言挙げす我れは 言挙げす我れは

反歌

磯城島の 大和の国は 言霊の 助くる国ぞ ま幸くあり
こそ

ともある。

この日本国は「言霊の幸はう国」であり、その日本国に住む人々や、想い、生活や文化を言霊が守っている「国」であると言っているのである。

言霊には、呪力がある。

『古今和歌集』の「假名序」には、

やまとうたには、ひとのこゝろをたねとして、よろずのとの葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心におもふことを、見るもの

きくものにつけて、いひいだせるなり。花になくうぐひす、みづにすむかはづのこゑをきけば、いきとしいけるもの、いづれかうたをよまざりける。ちからをもいれずして、あめつちをうごかし、めに見えぬ鬼神をも、あはれとおもはせ、おとこ女のなかをもやはらげ、たけきものゝふのこゝろをも、なぐさむるは哥なり。

このうた、あめつちの、ひらけはじめりける時より、いできにけり。

とあるのである。
意識しておこう。

「うた」というものは、ひとの心から生ずるもので、この世界のあらゆる生命は「うた」を作らずにはいられない存在なのである。いったんこの世に生じた「うた」は、鬼神をも動かす力を持っており、この宇宙が生まれた時から「うた」はあった――

そう言っているのである。

ここにおいて

まさに「言霊」と「うた」とは同じものなのである。

いにしえ

古の聖なる書にも、

「始めに言葉ありき」

と記されているのは、まさにこのことを言っているのである。

現代の日本人が何か思う時、何か行動しようとする時、その思い、その行為は、ほのかに縄文に通じている。我々の持っている全てのものの底流には、縄文がある。

たとえば、縄文人は、全てのものには神が、あるいは霊が宿っていると考えていた。水にも、そらの石にも、木にも花にも虫にも、人の作った道具にも、時に人の心が作り出すかたちなき想いにさえ、その神が宿っていると考えていた。我が日本国に、これほど神々がおわし、これほど妖怪が闊歩しているのは、今も縄文的感性が我々の中に残っているからなのである。縄文の神というのは、言霊そのものである。「超ひも理論」、あるいは「超弦理論」と呼ばれているものである。

アインシュタインが、生涯求めて得られなかった、この宇宙の全てを語ることのできる「統一理論」の有力候補である。

どのような理論か。

この宇宙の最小単位は、点(粒子)ではなく、線(弦)であるというのである。たった一種類の「ひも」、いと「絃」が物質の最小単位である。なのに、どうして、この宇宙には多くの粒子が存在するのか。それは、この極小の「絃」いとが震えているからだというのである。それぞれの「絃」の震え方が違うので、それぞれがそれぞれ別の粒子であるかのように見えるだけで、その実体は、たった一種類の、一本の「絃」であるというのである。ヴァイオリンの絃が震えるように、この宇宙の全ての存在は震えているのである。つまり、存在というものは鳴って、鳴り響いているのである。

「宇宙は音楽に満されている」

これは比喩以上の意味を持っていることになる。

この「震え」もまた、『万葉集』や『古今和歌集』によれば、

「言霊である」ということになる。

言霊の大神は、全てのものに、音楽のように宿っているのである。

つまりだ。

これは、言霊というものが、全ての、あらゆる神の原形であるということなのではないか。

物語は、時空を旅する旅人である。

旅の乗りものは、人の脳だ。

人の脳は、物語を作らずにはいられない。物語を作るために、人の脳は働き、機能し、進化してきたのだ。

たとえば、直立歩行をはじめた人類の祖が、ある日、森の中

で音楽を聴いたりする。

この時――

「あ、これは獣が自分を捕食して背後から襲おうとしているのだ」

そういう物語を作ることのできた脳だけが、生きのびるチャンスを得ることができたのである。

つまり、人は物語を作る。神話を作る。そして、その物語や神話を共有することができたのである。それによって、人の社会は発展し、生きのびてきたのである。

金を見よ。

お金というものを持ってれば、自分の欲しいものと交換できるといふ物語を、多くの人間が共有しているからこそ、この社会は成り立っているのである。

一説によれば、ネアンデルタール人は、この物語を多くの人間で共有できなかったという。せいぜいが、家族単位での共有までであった。我ら人類は、千人、一万人、一百万人、国家単位で、ひとつの考え、たとえば宗教などという物語を共有することができたのである。それ故、ネアンデルタールは滅び、我々人類は生きのびたのであると。

物語、すなわち、言霊のことである。

そして――

ここが重要なのだが、言霊というのは、つまり、「コンテンツ」のことなのである。

武蔵野の地は、縄文の特異点である。

日本から旅してきた神が、糸井川の姫川をさかのぼって、つまりフォッサマグナの西の縁に沿って移動して諏訪の地に至り、

そこから縄文ロードを東へ移動して武蔵野に至った。そしてまた、太平洋側からは、別の縄文集団の神が、フォッサマグナの東の縁に沿って移動し、この武蔵野の地に至ったのである。かくして、この地に、系統の異なる縄文の神が出会うこととなったのである。

スサノオという、荒ぶる神にして、哭きいさちる時、青山を哭き枯らし、海をも哭き枯らした。

『古事記』はこの様子を次のように語っている。

八^{やつ}挙^か須^{ひげ}心^{むな}前に^{さき}至^{いた}る^ままで^ま啼^なき^いさ^ちち^きき。その泣^なく^は状^{さま}は、青山は

枯^{から}山^{やま}如^{ごと}く泣^なき^い枯^から^らし、河^か海^{かい}は、悉^{しつじつ}に^も泣^なき^い乾^かし^きき。こ^こを^もさ

ち^ちて^て悪^あし^しき^き神^{かみ}の^の音^ねな^なひ、さ^さ蠅^{はえ}如^{ごと}く皆^{みな}満^みち、万^{よろづ}の^の物^{もの}の^の妖^{わざわい}

悉^{しつじつ}に^も発^はり^きき。

哀^あし^しみの^の王^{わう}スサノオの^のゆ^ゆく^く時^{とき}、大^{おほ}地^ちは^は響^{とよ}み、激^{おどろ}しく震^{ふる}撼^たした。

スサノオはまた、旅する神にして、闘^{たたか}う^う神^{かみ}であり、来^き訪^{ぼう}神^{かみ}にして、大^{おほ}地^ちに^に五^ご穀^{こく}を生^なむ^む豊^{とよ}穰^{じやう}の^の神^{かみ}である。さらにはもの^{もの}の^のけ^けの^の王^{わう}にして、悪^{あく}龍^{りゆう}と闘^{たたか}う^う物^{もの}語^ごの^の王^{わう}である。すなわちスサノオは言^{こと}霊^{たま}の^の王^{わう}にしてコン^{コン}テン^{テン}ツ^ツの^の王^{わう}である。

かくしてスサノオがお^お作^{つく}り^りにな^なった^た和^{やま}歌^{とうた}、

八雲立つ 出雲八重垣 妻ごみに 八重垣作る その八重垣を

は、この日本国に生まれた最初のコンテンツとなったのである。

この武蔵野の地に、出雲の神スサノオと、伊勢の神アマテラスをおよびすれば、これを^{ことほ}寿ぎ、鳳と風の霊鳥が天より飛来してこの地で舞い踊った。この鳳凰を、守りとなし、癒^{いやす}しの神、産^{むす}びの神、合わせて言霊の大神として、この令和神社におまつりもつしあげることは、まことにまことに意義深きことなのである。

令和二年吉日 夢枕 獏